



せき まりな
関 満里奈

(慶進中学校3年)

私の初めてのホームステイ

私は、このたびのオーストラリア旅行が楽しく、うまくいくように願っていたところにホームステイ先の家族とメール交換をして「早くおいで、待ってるよ」と言ってもらってから、旅への不安は消え去り、期待がどんどんふくらんでいきました。

レッドクリフ市は山陽小野田市と同じように海に面して自然に恵まれ、人々は芝生の上を裸足で歩いていました。道路は広くて車の渋滞もなく学校の敷地も広くて、のどかな町という印象を受けました。

ホストファミリーとはお互いの家族の事や、学校生活につ

いて話をしました。また週末には遊園地やイチゴがりに連れていってもらったり、家のボートにのせてもらったりと、オーストラリアの休日を満喫させてもらいました。訪問した小学校、高校でも私たちが歓迎してくれ、一緒に授業を受けることができました。小学校、高校ともに日本語の授業があり、11年生は日本人でも難しい敬語を勉強していて大変驚きました。周りの人たちは私のつたない英語も一生懸命聞いてくれたので積極的にコミュニケーションをとることができました。たった2週間でもたくさんの友達ができ、今でもメールを交換しています。楽しいことばかりで、あっという間の2週間でした。次回会うときはもっと日本のこと、山陽小野田市のことを話せるようになりたいです。

最後になりましたが、小野田青年会議所の皆様と市民の有志の方々のご厚意によりこのような貴重な体験ができました。ありがとうございました。レッドクリフ市で学んだことを役立てていけるよう努力しようと思います。



海の向こうに見えるのは みんなの笑顔と確かな絆



中学生海外派遣事業の随行者として
6人の中学生を引率した

ふくしま まさあき
福島 正朗 さん

今回の海外派遣事業で、中学生6人の随行者という大役を無事終えた福島正朗さんが、海外の世界に興味を持ったのは、高校時代に本市を訪問したレッドクリフ市の生徒との出会いでした。「英語は決して得意な科目ではありませんでした」という福島さんにとって、生活習慣や文化の違う同世代の生徒と同じ教室で過ごした時間は、忘れられない経験となったのです。



▲ホストファミリーのハリソンさん一家と

大学卒業後の留学生活ののち帰国した福島さんは、「外の世界に興味を持って飛び込んでいけば何とかなる。これまでの自分の経験を若い世代に伝えていきたい」と決意し、教員の道に進みます。しかし、体当たりで教え子と奮闘する日々を送る中でも、もう一つの夢、高校時代のあの日から胸に抱き続けた“レッドクリフ市への訪問”という夢は消えることはありませんでした。

そんな福島さんの願いを叶える機会が今年、偶然にも訪れたのです。当初、中止が決まっていた中学生海外派遣事業が市民の善意により事業継続が決まり、随行者は市民から募集することに。その記事を広報で目にした福島さんは、すぐに応募、審査会では自らの体験を交えながら、本市の国際交流に寄せる熱い想いをアピールし、見事中学生6人の随行者として選ばれたのでした。

滞在中は、学校での授業の様子を見学したり、小学生に日本語を教えたりと充実した日々を過ごした福島さんですが、常に頭の中にあっただのは、「姉妹都市の代表の一人として、自分にできることは何だろうか」ということだったそうです。多くの人の協力で実現した今回の中学生海外派遣事業という重みを胸に、あっという間の2週間は過ぎていきました。

「今までの派遣生と交流したレッドクリフの生徒が、日本を訪問することをとても楽しみにしていると知り、これまでの派遣事業を通じて生まれた絆が今も生き続けていると感じました。だからこそ、せっかく築いてきた関係をもっと多くの方々に知ってもらい、より広く、強い関係を育てていくために自分に何ができるのか考えていきたいんです。」帰国した福島さんの視線は、早くもこれからの両市の関係を見据えているようです。

福島さんの心の中では、さらに大きくて熱い、新しい夢が生まれようとしています。